

グリンバー訓練



1. 個人装備と班装備

ボーイスカウト活動での、ハイキングやキャンプは楽しいことがいっぱい。でも、しっかりした装備で活動しないと、思わぬケガや事故の元です。そこで、キャンプに必要な「個人装備」と「班装備」の点検をして見よう。

個人装備

個人装備は、余分なものを持たない事がポイントです。また衣類や小物に関しては、ひとつの品物を複数の用途に利用出来る(利用する)事が大切です。

- ① 衣類は、重ね着が大原則
- ② Tシャツは、下着・活動服兼用
- ③ レインコートは、立派な防寒服
- ④ 食材の包装箱などは、取り去っておく

班装備

班装備は、班員が共同で使用する物です。ダブったり、忘れたりしない様誰が用意(装備)するのかを明確にしておきましょう。

「班装備品リスト」に、誰が用意するのかを明記しておくといいでしょう。

また班装備には、テントや食器類など、かさばる物がほとんどです。調味料等の小さいものは、「コッヘル」や「やかん」の中などに入れて、収納スペースを節約する工夫を日頃から心がけよう。

・あると便利なもの

- ① 洗濯バサミ ② 細ヒモ ③ カットバン ④ ガムテープ

・注意すること

- ① 焚き火、カマドなどの作業を行う場合には、安価な軍手は『使用禁止』。
化学繊維で出来ている軍手は、火の粉や熱いものに触れると繊維が溶けて皮膚に大やけどを負うことになるからです。(水に濡らすのもNG)
→多少高価ですが、本革の手袋が一番。(班で装備しよう)

個人装備品リスト（例）

個人装備は、余分なものを持たない事がポイント

	チェック	品目	数量	備考
1		リュックサック		
2		制服		
3		着替え(衣類・靴下)		
4		ねまき(パジャマ)		
5		作業着		
6		防寒着		
7		雨具(カッパ)		
8		作業帽		
9		水泳パンツ		
10		くつ(はきかえ用)		
11		上履き(水遊び用)		
12		寝袋		
13		ウレタンマット		
14		三食器(はし・スプーン)		
15		お米		一合づつ、小分けにしておく
16		懐中電灯		
17		予備電池/電球		
18		洗面具		
19		タオル		
20		ふきん(食器拭き)		
21		雑巾(掃除用)		
22		新聞紙		
23		折りたたみ椅子		
24		洗濯はさみ		洗濯物干し用
25				
	チェック	品目	数量	備考
1		ハバザック		
2		登録証		
3		軍手(作業用)		
4		ナイフ		ケースに入れて持参
5		ロープ		
6		細ひも		2～5メートル位
7		手旗		
8		マッチ(防水)		
9		ハンカチ		
10		ちり紙(ティッシュ)		
11		裁縫セット		
12		手帳/筆記用具		
13		シルバ・コンパス		
14		座標定規		
15		歌集		
16		個人救急用品		バンドエイド・三角巾など
17		飲みなれた薬		頭痛薬/はきけ止め等
18		虫除け		蚊取り線香/キンカンなど
19		保険証のコピー		
20		水筒		
21		弁当		腐りにくいもの
22		資料		進歩手引き・プログラム資料など

班装備品リスト（例）

誰が持つかを明確にする事がポイント

	チェック	品目	数量	担当者名	備考
1		テント			
2		食堂フライ			ゴムバンド・張づな含む
3		フライ用ボール			
4		フライ用ペグ			
5		ナイロン・ロープ			10～20メートル位
6		麻ひも			10～20メートル位
7		ランタン			
8		予備マントル			
9		折りたたみシャベル			
10		ナタ			
11		のこぎり			
12		ガソリン・バーナー			
13		クーラーボックス			
14		ポリタンク			
15		パケツ			
16		ガムテープ			
17		古新聞			
18		火はさみ			
19		ブルーシート			
20		スタンド			テーブル用の足
21		洗濯石鹸			
22		針金ハンガー			
23					
24					
25					
26					

	チェック	品目	数量	担当者名	備考
1		各メニュー用食材			
2		調味料セット			塩・コショウ・砂糖・コンソメ・油・醤油
3		包丁			
4		まな板			
5		はんごう			
6		コッヘル・セット			
7		おたま、しゃもじセット			
8		フライパン			
9		布巾/ペーパータオル			
10		タワシ/スポンジ			
11		洗剤			
12		ビニール袋			
13		ごみ袋			
14		ラップ/アルミホイル			
15		乾燥用ネット			
16					

2. パッキング

初心者は、なんでもかんでも持っていきますが、スカウトともなれば、必要最小限のものを持ち物とすることができるはず。

さらにリュックサックへの正しい収納と背負い方を学んで班長のレベルアップをしよう。

リュックに収納する主な装備



リュック収納方法



3. 野営地の選び方

野営地を決める3つのポイント（優先度順）

- ① 設営する場所の安全性
- ② 風速と風向き
- ③ 降雨の有無または降雨の可能性

① 設営する場所の安全性

もし野営地全域がフリーサイトということであれば、先ず自分たちの設営する場所から決めることになりますが、この場合はやはり安全性の確保から考慮すべきでしょう。背後に山や丘の斜面があったり、川のすぐ近くというのは現在の天候にかかわらずさけておくべきです。（ましてや川の中州に設営するのは自殺行為です）

風の強い時や雨が降っている時には、それらを避けられるような場所があればそこを設営場所にします。周辺の景色や炊事場、管理棟、トイレなどの場内設備からの距離は、前述のような事項をクリアしてから考えるようにしましょう。

② 風速と風向き

高原でさえぎる物が無かったり、海に面したキャンプ場では、かなりの強風が吹くことがあります。

そういう場合、テントは出来るかぎり木立や、岩陰などで風を避けられる様に配置します。次にタープですが、こちらはメインポールが風向きと平行になるように設置します。これを逆にするとタープにまともに風を受けることになるので気を付けましょう。

また、あまりに風が強い時はタープの設営そのものを断念した方が良いでしょう。

③ 降雨の有無または降雨の可能性

降雨時または降雨の可能性が高い時は、テントの出入り口をタープのひさし内に設置すれば良いでしょう。雨の量が多い場合は、使用しているテントが小型なものであるなら全体または大半をタープ内に入れてしまうというのも手です。タープ内のスペースは当然狭くなりますが、フライシートよりは遥かに確実にテントを雨から守ることができます。

テントを設営してはいけない場所

①植生の痕跡のない場所は増水する

川原を見るとテントを張りたくなりますが、木々草木の植生がまったく見られない場所は水が出るといっきに増水する場所。

こういう場所にはテントを絶対に張らないこと。



②川原や中州は川そのものと思え

川原や中州で多少草木が生えていても、そこは増水したことの無い場所とは限らない。

増水する天候でなくても川原や中州には絶対にテントを張らないを鉄則にしよう。

特に中州はいざというとき逃げ道がない。

これをしかと肝に銘じてキャンプする場所を選ぼう。



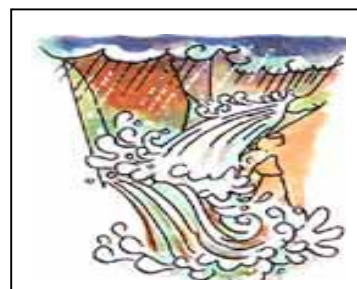
③砂防ダム真上は危険

激しい土砂の流出をくい止めるために造られるのが砂防ダム。それだけに土砂堆積は進み河床勾配が緩くなり川原は平坦でキャンプサイトに格好に見えてくる。しかしここが一番危険な場所なのだ。



④山間部では雨が降ると鉄砲水

日本の溪流は急峻な谷ゆえ、ひとたび雨が降ると、川が一気に増水し鉄砲水となるケースが少なくない。雨が降ったらすぐに川から離れる、が鉄則だ。

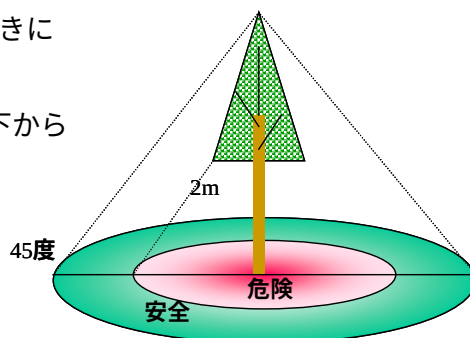


⑤大木の真下にテントは張らない

ほかに何も無い大木の真下は雷が落ちたときに飛び火するのでここも避けること。

樹木の頂点から45度の角度の範囲内で真下から離れたところが影響を受けにくい場所。

一番は林の中だけど。



⑥がけ下は、土砂崩れの危険あり

がけや大きな段差のある下は、落石や土砂くずれの可能性がある
あるので絶対にテントを張ってはいけない。



⑦丘の上は、強風に注意

丘の上では強い風が吹いたり、落雷の危険性がある



⑧低地やくぼみでは、水に気をつけよう

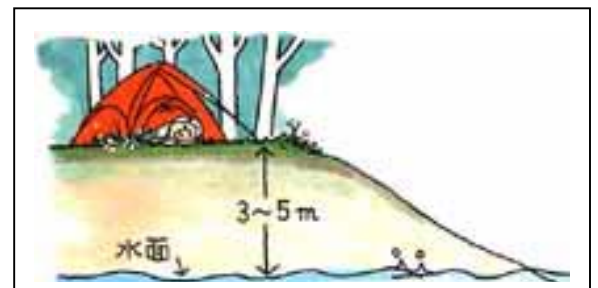
低地は雨が降ると、まわりから水が流れ込んで来て
水溜りとなったり、雨水の流れ道となるのでテントは
張らないようにしましょう



⑨テントは水面からなるべく高いところに

場所にもよるけれど川の急激な増水は平常時の
水面から3～5mくらいまで増えるのがよくある
ケースだといわれる。

だから少なくともこれより高い所にテントを張りたい
ものだ。周囲の植生で判断できないときはこのやり方を
採用しよう。



野営地K Y Tシート その1

日常を離れて自然の中にやってきた。

『さあテントを張ってすぐに行動だ！』といきたいところをグッと抑えてまず周囲を観察しよう。
テントが浸水したり風で飛ばされてしまっては最悪だから、川の流れや岸辺の様子、樹木の植生から
キャンプサイトを決めたいものだ。 それぞれのテントサイトで、予想される危険を考えてみよう。



	予想される危険
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
まとめ	

野営地 K Y T シート その2

やっと野営予定地に到着しました。 さて、あなたはどこに『テント』を設営しますか。
絵の中に『テント』書き込んでください。 また、そこに決めた理由を書いてください。



	キャンプ設営地に決めた理由
1	
2	
3	
4	
5	
まとめ	

4. キャンプでの基本ロープワーク

ロープワーク<基本的なロープワークを覚えておけばキャンプで絶対トクをする。>
ロープワークは技術と経験が物を言う。しかし、その方法は決して難しいものではない。
基本的なロープワークを覚えておくだけでさまざまな場面に応用できるのだ。
これだけ知っておけば、絶対に役立つ 5 種類のロープワーク。



●キャンプサイトで必要な基本的なロープワークは、

1.もやい結び

タープのポールに輪を作って張り綱を掛ける「もやい結び」。

カヌーを杭などに繋いでおくのにももやい結びは有効だ。

2.張り綱結び

タープの張り綱をペグに掛けて引く場合は、ロープの長さを自由に調節できる

「張り綱結び」を使う。

3.八の字しばり

枝をまとめて結わき鍋を置く三脚を作るには「8 の字しばり(三脚しばり)」がいい。

4.ふた結び

2本の立木を利用しロープを掛けるには「ふた結び」で留める。

5.巻き結び

「まき結び」は汎用性も高くアウトドアで重宝する。

【コブや輪を作る】

一重結び 結びの基本です	八の字結び 大きなこぶができます	仲仕結び 大きなこぶができます	引き解け結び 引くとはどける輪
よろい結び 途中で固定した輪ができます	もやい結び 輪の大きさが変わらない	鎖結び	

【つなぐ】

本結び 力が加わるほどほどけにくい	一重つなぎ 太さの違うロープをつなぐ	てぐす結び 滑りやすいロープをつなぐ

【他のものに縛る】

ふた結び 結び目が移動できる	クランチ結び 力が加わると締まる	ねじり結び 力が加わると締まる	てこ結び 途中で棒などを結ぶ
まき結び 杭などを縛る	自在結び 長さが調節できる	はさみ縛り 二本を一緒に縛る	三脚縛り 三脚を作る
角縛り 直角に縛る	筋交い縛り 斜めに縛る		あぶみ縛り ブランコなどを作る

【その他】

縮み結び	ウォールノット	棒結び	エビ結び	コイルまき

5. ドームテントの設営方法

1. テントを広げる

まず地面にテントを広げます。テントの角を風上に向け、立ち上げた後に風の抵抗を軽くできるように置きます。さらにポールが通りやすいように、テントのシワを伸ばしてスリーブのねじれなどを修正しておきます。



◆ ポイント【ドアパネルは全開に】

ドアパネルが閉まったままだとテントが膨らまず、負荷のかかったポールが損傷する原因にもなります。空気が入りやすいようにドアパネルは大きく開けましょう

2. ポールをスリーブにとおす

ポールをジョイントしたら、スリーブに通しましょう。ポールはあくまで押し、反対側から強くひっぱったりしないようにしましょう。ひっぱると、ポールが外れて中のショックコードが切れてしまう可能性があります。スリーブをひっぱりながらポールを推すのが、コツです。



3. テントを立ち上げる

ポールを通したら、ピンやグロメットで全てのポールの片側を固定します。固定し終わったら片手でスリーブをぴっぱりながら、グイッとポールをたわませてテントを立ち上げ、ポールのもう片方をピンやグロメットで固定します。一人でもできますが、2人ならよりスムーズです。



4. テントをペグで固定する

2人以上でテントを持ち上げて移動し、最終的な位置決めをします。位置が決まったらペグダウンし、テントを固定しましょう。ペグダウンはボトムがピンと伸びるように張り、写真のように対角の順番で打ち込んでいきます。



5. フライシートを取りつけて完成

フライシートの向きをテントの出入口に合わせてから、かぶせます。テント高がある場合は風下から風上に向かってかぶせるとシートが風ではらみ、スムーズです。フライシートの前室はファスナーを閉じた状態で固定します。開いた状態で固定すると、ファスナーが閉まらない場合があります。



テント設営のコツ

①フライシートは、しっかりと張る。

インナーテントとフライシートがくっついていて、結露でインナーテントが濡れ、時には隅に置いた服などを濡らしてしまう場合があります。フライシートは、インナーテントとの間で通気ができるようにしっかりと張りましょう。



②グランドシートは、小さめに。

地面からの湿気を防ぐために、工事用シートなどをテントの下に敷くのは有効です。その際は、テントサイズより一回り小さいサイズにしましょう。大きいと水滴などが流れこみ、結局テントの底を濡らしてしまうことになるからです。

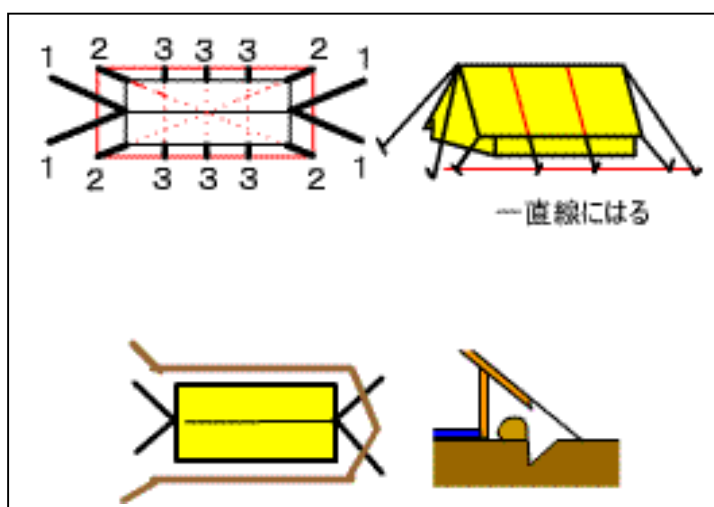
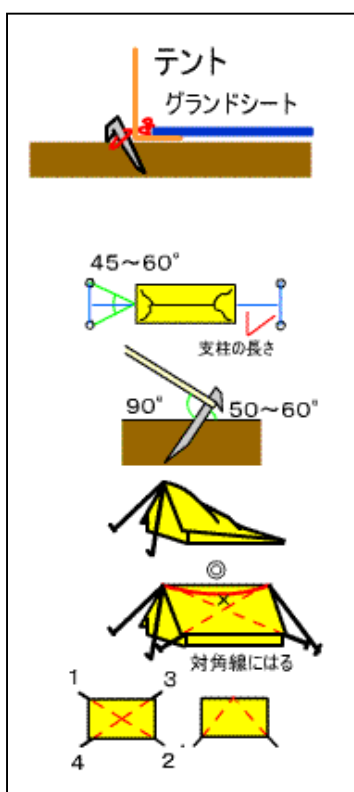


③快適なフロアリング。

面からの冷えを効率よく防ぐのが基本です。まずはインナーマットや銀マットを一番下に敷きます。その上に個人用のマットを敷き、その上に寝袋を敷くのが基本です。



「A型テント設営のポイント」



●ドームテントの収納方法

1. テントを干します

軽く叩いて汚れを落としたら、まずフライシートを外し、次にテントのペグを抜きます。抜き終わったらテントを倒してボトムを干しましょう。フライシートも干して内側の湿気を取りのぞきます。理想は風通しのいい場所で陰干しです。干す場合、テントが風に飛ばされないように、ペグダウンしておくことを忘れずに。



2. フライシートをたたみます

フライシートが乾いたら畳みましょう。フライシートは立体縫製なのでぴったりとは畳めませんが、できるだけ四角く畳んでいくのがポイントです。



前室部分を折って長方形にします。



中心に向かって、さらに両側を内側へ折り込みます



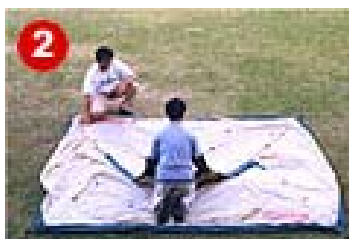
テント収納袋の長さに合わせて、もう一度折ります



シートの天井側から下に向かって空気をぬきます

3. テントをたたみます

テントが乾いたら畳みましょう。ポールを抜くときは、設営の時と同様に押して抜きます。またドアパネルは大きく開けて、中の空気が外へ抜けやすいようにしましょう。ポールを抜いたらテントの天井部分をひっぱってシワを伸ばしながら、点線の付近で折り曲げます。ドアパネルは全部閉めず、下部だけを開けておきます。



①と同様の手順で残りの3面も畳み込みます



最終的に、二重のじゃばらになります



両サイドを内側に折りこんだ後、さらに収納袋の長さに合わせて折りこみます

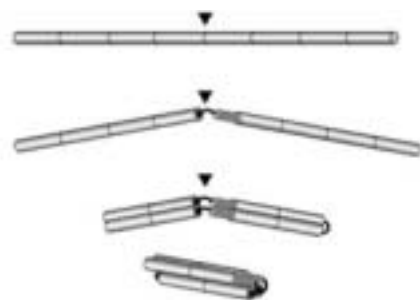


◆ポイント [空気を逃がす畳み方]

下部を開けたドアパネルを塞がないように畳むのがポイントです。ポールで巻き上げる際、開けた部分からテント内の空気が排出され、コンパクトに巻き上げられるからです。

4. ポールをたたみます

ポールは、乾いた布でよく拭いてから畳みましょう。
端から折るのではなく、センターから折り畳みます。
端から折ると中のショックコードが片側にひっぱられ、
断線する可能性があるからです。



5. ポールを軸にしてフライシートを巻き上げます

ポールをケースに入れたら、まずフライシートを
巻き上げます。

中の空気が抜けるように、上から下へ巻きます。
次に巻き上がったフライシートを軸に、テントを
巻きあげます。この時も中の空気が抜けるように、
ドアパネルに向かって巻きます。

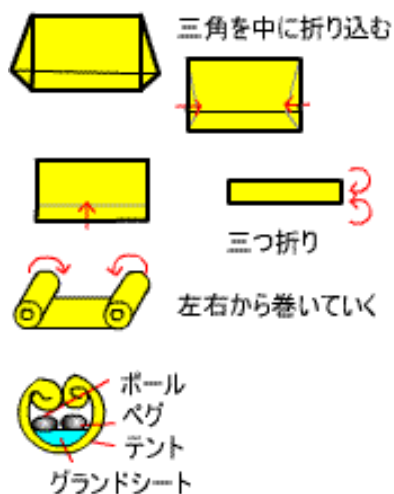


◆ポイント【入れるのではなく被せる】

巻き上げたテントは、ケースに入れるのではなく、ケースを
被せるようにすると形崩れしないでスムーズに収納できます。
ペグやロープを入れるスペースも十分確保できるはずです

メモ

A型テントの収納ポイント



6. タープの設営方法

①タープの位置を決める

テントサイトに着いたら、まず頭の中でタープとテントの配置をイメージしてください。
そのイメージに沿って地面にタープを広げ、ポールとロープ、ペグを実際の位置に配置します。配置がすんだら両方のグロメットの位置を地面に印しておきます。



◆ ポイント1 [ペグダウンの角度は 60～90 度]

延ばしたロープの先端にペグを打ち込みます。
地面の質にもよりますが、ペグを打ち込む角度は地面に対して 60～90 度が最も効果的です。
打ち込んだらロープをペグにひっかけておきます。



ポイント2 [ロープの角度は 80 度]

ロープはポールの1.5倍の長さにし、ポールを挟んで約 80 度の角度で延ばします。最も強度が確保できるのは 90 度ですが、立ち上げてロープをきつく張るとグロメットが外側に引っ張られ、角度が広がってしまいます。あらかじめその分の角度を絞っておくわけです。

②張り綱で、ポールを立てます

片方のグロメットにポールを刺し、ロープをひっかけてポールを立ち上げます。地面に印を付けておいた位置にポールの下部をセットし、垂直に立たせた後、ロープの張り具合を調整します



③タープを水平にします

もう一方のポールも (2) と同様な手順で立ち上げます。立ち上がった後真横から眺め、2本のポールが垂直か、タープが地面に対して水平かを確認し、曲がっていればこの時点で調整。調整が済んだら、ポールの下部を 20cm ほど内側へずらします。



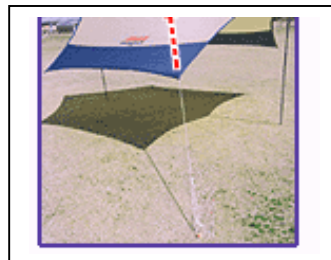
④張り綱で両サイドを広げます

4カ所のループにロープをセットし（ふた結び）、ロープを張っていきます。ロープが長ければタープの有効面積は大きく、短ければ小さくなります。全体の調整が済めば完成です



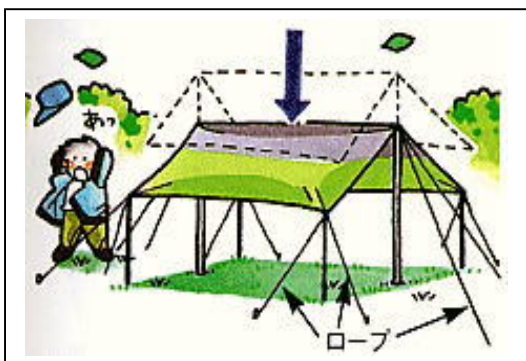
ポイント3 [天井ラインの中間に合わせる]

最初のロープは、タープの天井ラインのちょうど中間点に向かって張ります。次にその対角にあるロープを同様に張ります。この2本のロープは対角線上の1本のラインとなり、高い強度と美しいシルエットが得られます。さらに残り2カ所も同じ手順で張ります



雨の日は、両はしを下ろす

両端のポール位置をグロメット一つ分内側に移動させ、タープの両端を下ろすことで、雨のふきこみや、風の進入を防ぐことができる。



風の強い日は、低めに張る

ポールのつながきをひとつ少なくして、全体を低めに張ろう。あまり風が強い時は、撤収。



陽射しの強い日は、地面に固定

センターポールの位置をずらして、タープの片側を地面に固定しよう。風よけにも応用できるよ。

タープ・ワーク

■レクタングラー

サイドからの強い日差しや雪には両端を下げて対応		雨 ★★★★★ 風 ★★★★★ 雪 ★★★★★	長方形の長辺サイドにメインポールを立て、手前のグロメットに短いポールを2本セット。短辺サイドが折れ曲がるように張り綱を張る。狭いキャンプサイトで設営する場合や、サイドから射し込む日差しや雨、雪、風などをカットする場合に非常に有効な張り方だ。
雪、雨、風、大荒れの天候にも対応する全天候型		雨 ★★★★★ 風 ★★★★★ 雪 ★★★★★	タープの一方のサイドを下げて壁を作り、もう一方は手前のグロメットを短いポールで支え折れ曲がるように張る。これで強風を伴う大雨でも完全にブロックできる。さらにタープの下にテントをセットすれば寒さ対策にもなり、全天候に対処できる防御体制が整う。
予備のロープを使って雨の逃げ道を作る		雨 ★★★★★ 風 ★★★★★ 雪 ★★★★★	タープに雨が溜まるような時は、あいているグロメットに予備のロープを通し溝を作るとよい。雨はこの溝を通してスムーズに流れ落ちる。落ちてくる雨水で身体や荷物を濡らさないよう、いちばん出入りが少なく荷物から遠い箇所にロープを張るのがポイントだ。
両サイドを閉じて風と雨、雪の侵入を防ぐ		雨 ★★★★★ 風 ★★★★★ 雪 ★★★★★	強い風や土砂降り、降雪時にはサブポールを使わずに、2本のメインポールだけで三角テント型に張る。遮蔽度は高くなるが、内部の空間は想像する以上に広く快適なリビングスペースを確保できる。両端は角だけでなく、中央のグロメットも固定すれば一層効果的。
ブラインドを作りプライバシーを確保する		雨 ★★★★★ 風 ★★★★★ 雪 ★★★★★	区画同士がくっつき合ったキャンプ場などでプライバシーを確保したい時や、強風時には、タープのサイドを下げてグロメットに直接ペグを差して地面に固定すれば、ブラインドの役目を果たしてくれる。

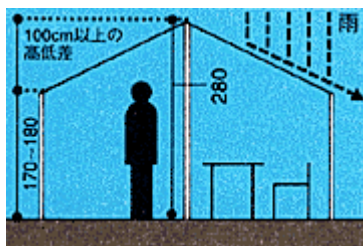
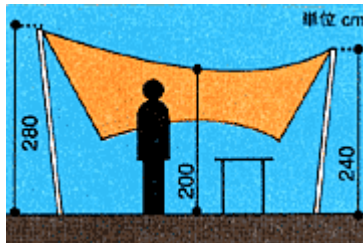
■ヘキサウイング

天候が怪しくなったら身を低くして備える		雨 ★★★★★ 風 ★★★★★ 雪 ★★★★★	どうも雲行きが怪しくなってきたな、と判断した時は、タープを低く設営する。通常使う 240 ～ 280 cmのポールに代えて、210 cm、場合によっては 180 cmの短いものを使用する。防風・防雨効果が向上し、さほど強くない短時間の天候不順なら、これだけでも十分対処できる。
サブポールを使えば開放感も確保できる		雨 ★★★★★ 風 ★★★★★ 雪 ★★★★★	レクタングラータープほどの開放感はないヘキサウイングだが、片側の長翼、短翼のグロメットに 180 cm前後のサブポールを立てて設営すれば、全面開放型になり広い視覚を確保できる。

ポールのセクションポイント

ポールの全長は、稜線部のクリアランス、人の出入り、雨や風に対する強度を考えて選ぶ。

ヘキサタイプは稜線部のクリアランス。レクタングラーは雨水の流れを生む高さを基準に選ぶといい。



【ヘキサ&ウイングタイプ】

稜線アール部のクリアランスを 200cm に設定すると、240cm×2 本の組み合わせ以下は無理。

280 cm と 240cm の組み合わせは開放と遮蔽の 2 つのメリットを生みスノーピークヘキサには最適な選択。

【レクタングラータイプ】

レクタングラーは、雨水の流れと全方向からの人の出入りを意識して、タープ面の傾斜を稼ぐセッティングが望ましい。メイン 280cm とサブ 170 ～180cm のセッティングは雨水の流れがスムーズ。

7. ランタンの扱い方

1. ランタンの種類



ホワイトガソリン・タイプ

特徴というより、このタイプの最大の魅力はランタンそのものが持つ雰囲気のような気がします。一般的に LP ガス・タイプより明るいと言われていますが、最近は非常に明るい LP ガス・タイプも数多く発売されていますので、一概に明るいのが特徴とは言えなくなりました。もちろん燃料代が安く経済的という利点もありますが、その分取り扱いがちょっと面倒という難点もあります。それでもデザインが醸し出すレトロな雰囲気や、ホワイトガソリン特有の柔らかな光は、他のタイプにはない独特の魅力です。気温が低くても安定した明るさを保ってくれるので、秋や冬もキャンプしようと考えている人にはおすすめです。



LPガス・タイプ

ガスボンベやガスカートリッジを装着すれば、すぐ点火できる操作の簡単さが最大の特徴です。ほとんどのタイプが自動点火スイッチを備えているため、マッチやライターを用意する必要もありません。200 ワットを越える大光量の大型モデルから、100 ワット以下のコンパクトモデルまで種類が豊富なのも魅力です。燃料代がホワイトガソリンより割高という難点がありますが、宿泊延べ日数の少ないキャンパーにとっては、ほとんど気にならない程度です。また燃料の特性として低温下で燃焼効率が落ちるため、十分な明るさを得られない場合がありますが、寒冷地仕様の燃料を使うなどの対策をとれば問題ありません。



電池・タイプ

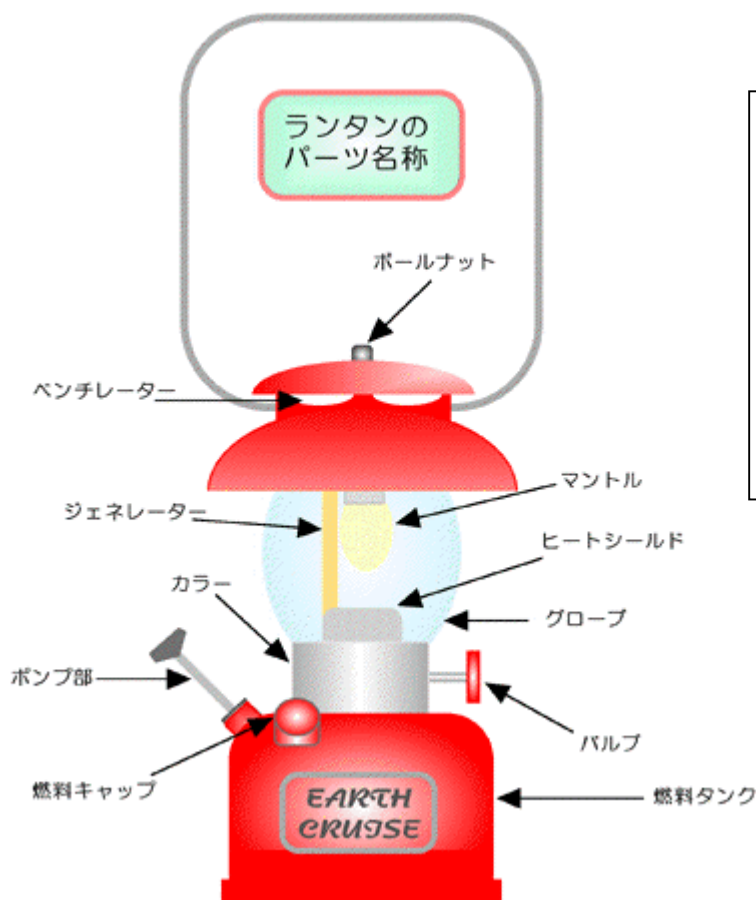
明るさという点では前の2タイプにおよびませんが、安全性という点で初級キャンパーには不可欠の照明です。使用目的は、テント内の照明や携帯用照明です。子供でも安心して使用できるため、ニーズに応じて複数のモデルを使うキャンパーも少なくありません。テント内の照明ならランタン型、夜間トイレへ行く時の照明なら懐中電灯型といったように使い分けるといいでしょう。最近はその両方を兼ね備えたモデル、リモコン機能のついたモデル、防水機能の付いたモデルなど、実に様々なモデルが発売されています。体験的に言って、大型モデルは電池の本数が多く不経済で、かさばる割りに明るさが乏しいという気がします。コンパクトな中型モデルの方が使い勝手はいいようです。



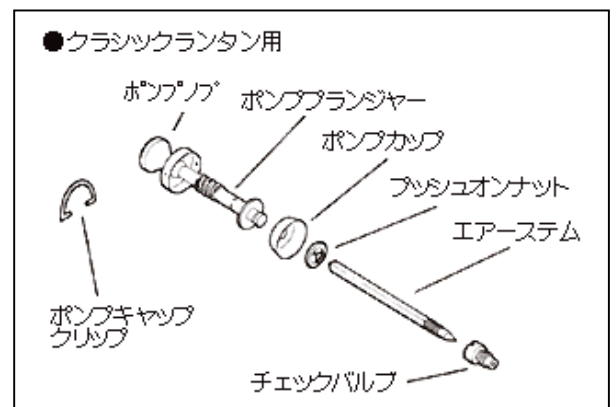
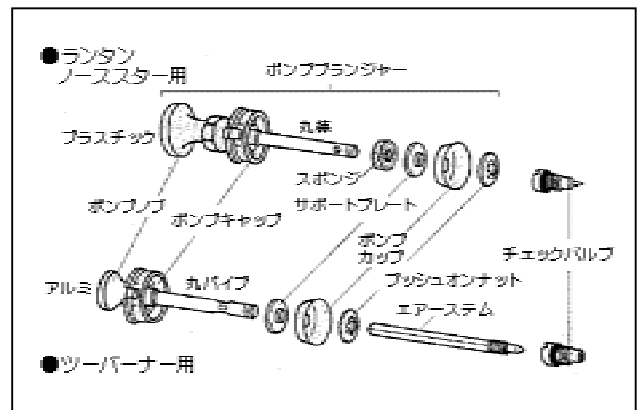
キャンドル・タイプ

必要性という点から考えると、なくてもいい照明ですが、キャンドルの光りが放つ独特の温もりは、キャンプの夜の雰囲気作りにひとやく買ってくれます。基本的に補助照明ですが、特に常夜灯として申し分なく、防犯的な意味も含めた就寝後の照明に格好です。ローソクという経済性と安全性は大きな魅力ですが、使い終わった後のロウの除去作業がちょっと面倒なモデルもあります。価格も安いしあれば何かと重宝するので、初心者にもひとつおすすめしたいランタンです。

2. ランタンの各部名称



ポンプ部の構造と部品名



3. マントルの交換方法



軽く折り目を伸ばすように広げます。

マントルは必ず使用するモデルに対応したのを使いましょう。また破損しやすいので取り扱いは慎重に。マントルを取り出したら、装着する前に指先で袋状にふくらませ、折り畳んであったクセをほぐしてあげましょう。



この時点でヒモはまだひっぱりません。

あらかじめヒモを二重にゆるく結び、チューブにセットしたら後はひっぱるだけの状態にしておきます。こうするとシワが均等になり、きれいに取り付けることができます。チューブに取り付けてから結んでも問題はないのですが、シワが片寄ってしまう場合が多いようです。



マントルが他の部分に触れないように。

バーナーチューブの先端に切つてある溝に、マントルのヒモの部分がくるようにセットし、ヒモを絞ってしっかりと取り付けます。強く縛り過ぎるとヒモが切れたり、シワになったりしますので、力を入れ過ぎないように注意してください。



マンテルを傷つけないよう注意しましょう。

もしヒモを縛ってシワが片寄った場合は、この時点でできるだけ均等になるように整えておきましょう。その後余ったヒモはカットします。ヒモをカットしたらもうさわらないこと。万が一マンテルが外れると、再度取り付けるのは至難の技となります。



燃えはじめたらもう触ってはいけません。

マンテルは使用する前にいったん燃やして灰状にしなければなりません。これをカラヤキと言います。カラヤキは、マンテルの下から火を点けて、火が上に燃え広がるように燃やします。燃えたとまず黒くなりますが、灰になれば再び白に戻ります。燃やすといっても一気に燃えるのではなく、少しずつ広がるといった感じです。消えたように見えても案外燃えているものです。もし消えてしまったら、燃え残った場所に再度点火してください。



マンテルは最初の半分くらいに縮みます。

火がなかなか燃え広がらない時や、黒い部分が白くならない場合は、そっと息を吹きかけ燃焼の手助けをしてやるのも効果的です。ただし息はあまり強く吹きかけないこと。強すぎると破損してしまう場合がありますからです。全体が均等に白くなればカラヤキ完了です。



点火はタイミング次第。習うより慣れろ、です。

マンテルの交換時期



マンテルは、多少の穴であれば問題ありませんが破れた穴から炎が噴出してガラスのグローブに吹きつけている様なら替え時です。

穴が開いたままでも燃焼しますが、不完全燃焼の原因になるし、光量も落ちてしまいます。まだまだ使えると思いがちですが、ランタンの性能をフルに引き出すためには、マンテルが正常であることが条件です。

LP ガス・タイプの場合は、燃料バルブを開けて自動点火スイッチで点火すれば OK です。1回で点火しなかった場合は、いったん燃料バルブを OFF まで戻し点火作業を繰り返します。

ホワイトガソリン・タイプの場合は、燃料バルブを目一杯開け、シューという音がジジジという音に変わるまで待ち、音が変わったらバルブを OFF へ戻し、約1分ほど放置して生ガスを抜きます。

その後バルブを開けて点火します。点火したら30回ほどポンピング。なお、点火直後に炎が安定しない場合は、燃料バルブを素早く開け締めすると安定する場合があります。

どちらのタイプにしても、点火のタイミングが悪いとグローブ内に滞留したガスが一気にボッと燃焼し、ビックリしてしまう場合があります。

うまく点火できない場合は、グローブを外して点火し、その後にグローブや蓋を取り付けるという方法もあります。ただしその際は火傷しないよう十分注意してください。

4. ジェネレータの交換方法

「ジェネレータ」とは、金属管の中に細い針金がセットされた部品のことで、バルブの動きに合わせて中の針金が動いて、先端の小さな穴を開いたり閉じたりします。（右図参照）この為、先端の隙間にゴミやカスが溜まると燃料バルブを開いても燃料が安定して出なくなったり、バルブを閉じてても燃料が止らなくなったりします。



まず、ボールナットをはずし、ベンチレーター、グローブをはずす。
この時、マントルをはずしておく、作業がしやすい。
もちろん、マントルをつけたままでも作業はできます。



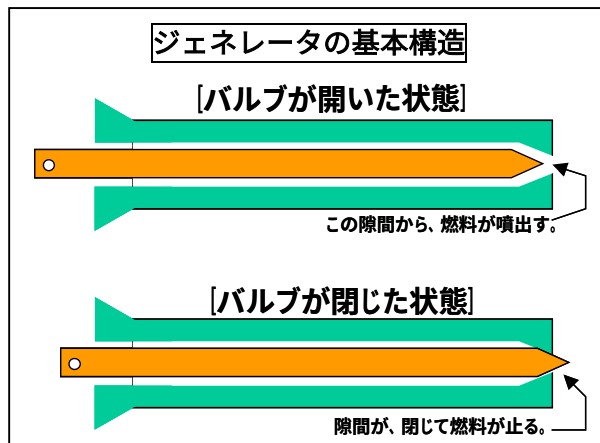
次に、ジェネレーター側（上側）のネジをはずし、ジェネレーターを上へ上げて取り外す。



すると、こんな感じになります。



次に新しいジェネレーターに、先ほど取り外したネジをとおし、上のほうから取り付ける。



ジェネレーター内部の、L字の部分本体の方の穴に差し込む。
この時、内部の部品がバラバラにならない様に注意しましょう。

◆内部部品の先端部の細い針金が曲がるとおしまいです。
またジェネレーターを買うことになります。



最後にネジを締めておわりです。

◆この時ネジをしっかり締めないと燃料漏れの原因となります。

5. ランタンの活用

① 虫を除ける、ランタン・ワーク



バルブで光量を上手に調整しよう。

最もポピュラーなランタンワークのひとつが虫除けです。テーブルの上には光量の小さいランタンを置き、タープの外に光量の大きいランタンを配置します。すると虫たちは外の明るい光に誘われて、テーブル周辺には近寄らなくなるという寸法です。光量に差があればあるほど効果は増大しますが、それでも完全に虫を排除することはできません。補助的に虫除けキャンドルを併用するのも手ですが、侵入者は虫ではなく私たちの方であるという認識は、頭の片隅においておいてください。

② カラビナのランタンハンガー



カラビナをロープに巻き付けます。
大型ランタンを吊す時は慎重に。

ランタンを配置する自由度が高ければ高いほど、理想的な夜の照明環境を作ることができます。ランタンハンガーやスタンドを活用するのはもちろんですが、登山用のカラビナという道具があると、写真のようにタープのロープを利用してランタンを吊すことができ、ランタンワークの自由度がさらに増します。カラビナをご存じない方は分かりづらくかもしれませんが、ロープをはずす必要はありませんから、気軽にセットすることができます。ただし大型のランタンを吊す場合は重量がありますから、ペグやロープの張り具合を十分チェックしてから吊しましょう。

③ アルミホイルで、簡単リフレクター



アルミホイルの幅によって光も変化します。

ランタンには光量を調節するバルブがついていますが、照らす方向を調節することはできません。そこでリフレクターと呼ばれるアクセサリがメーカーから発売されています。これは、光を特定の方向だけに集めて照らす道具です。しかしアルミホイルがあれば、自作のリフレクターを作ることができます。グローブを外し、光を遮りたい部分にアルミホイルを貼るだけ。明かりを片方に集中できると同時に、反対側を間接照明のような柔らかい光に変えることができます。明るさ、方向、間接直接のそれぞれを使い分けて、夜の照明を演出してください。

④ ケースのガタつき防止



注意さえすればランタンは以外に頑丈です。

ランタンは衝撃に弱いので、ケースは必需品です。しかしケースに入れたからといって油断は禁物。ケース内のガタつきでマンテルやグローブが破損してしまうということもあります。ならばそのガタつきを取りのぞきましょう。簡単でてっとり早いのが買物の時にもらうビニール袋。自由に折り畳めるし、ほどよい伸縮性がランタンとケースの隙間を上手に埋めてくれます。タオルなどの布でもいいのですが、伸縮性がない分調整は慎重にやらなくてはなりません。もちろんケースに入れたからといって、ケースの上に重いモノを置いたりするのは厳禁。あくまでやさしく扱しましょう。

6.ランタンの保管方法

① タンクの圧力を抜いておく。



ホワイトガソリン・タイプの場合は、収納する時必ずキャップを緩めて内部の圧力を抜きましょう。
圧力がかかったまま長時間移動すると、危険な場合があるからです。
もちろん燃料も抜いておくのは言うまでもありません。

加圧状態でしまい込まないこと。

② 虫の死骸は、取り除く。



ランタンにはいたるところに虫の死骸がこびりついているものです。
保管する前に歯ブラシでブラッシングし、丹念に取り除いておきましょう。
ちょっとした隙間にも入り込んでいますから、入念にチェックしてください。
できればマントルも外してバーナー部分の目詰まりがないかも確認しておきたいものです。（マントルがまだ新しい場合は次の取り替えの時にチェックしましょう）サビがある場合はブラッシングでサビを落とし、必ずサビ止めをしておきましょう。防錆剤を布にしみ込ませて、バーナー部分を磨くように拭けば OK です。

パーツの裏側もよく確認してください。

8. コンロの扱い方

1. コンロの種類



ガソリン・ツバーナ

キャンプ場で最も多く見かけるストーブが、コールマン社製のこのタイプです。ホワイトガソリンを燃料とするツバーナーは、実質的にコールマン社製しかありませんが、そのイメージ、実用性、耐久性などの点で大きな人気を誇っています。タンク内の空気を加圧して燃料を送り出す方式のため、ポンピングという作業が必要です。その分 LP ガス式のストーブより操作は面倒ですが、様々な条件下で得られる安定した火力は大きな魅力といえます。



LP ガス・ツバーナ

多くのメーカーから様々なモデルが発売されています。共通する特徴は、ホワイトガソリン・タイプに比較してポンピングの必要がなく、燃料を装着するとすぐに点火でき、安定した火力が得られるという操作の簡単さです。燃料の脱着も簡単で、ビギナーでも十分に使いこなせるモデルがほとんどです。LP ガスの難点である低温にも、多くのメーカーが寒冷地仕様の燃料に対応しています。純正燃料しか使えないモデルがほとんどのため、品数の少ないキャンプ場の売店では燃料が入手しづらいこともあります。予備燃料は用意しておきましょう。



ガソリン・バーナ

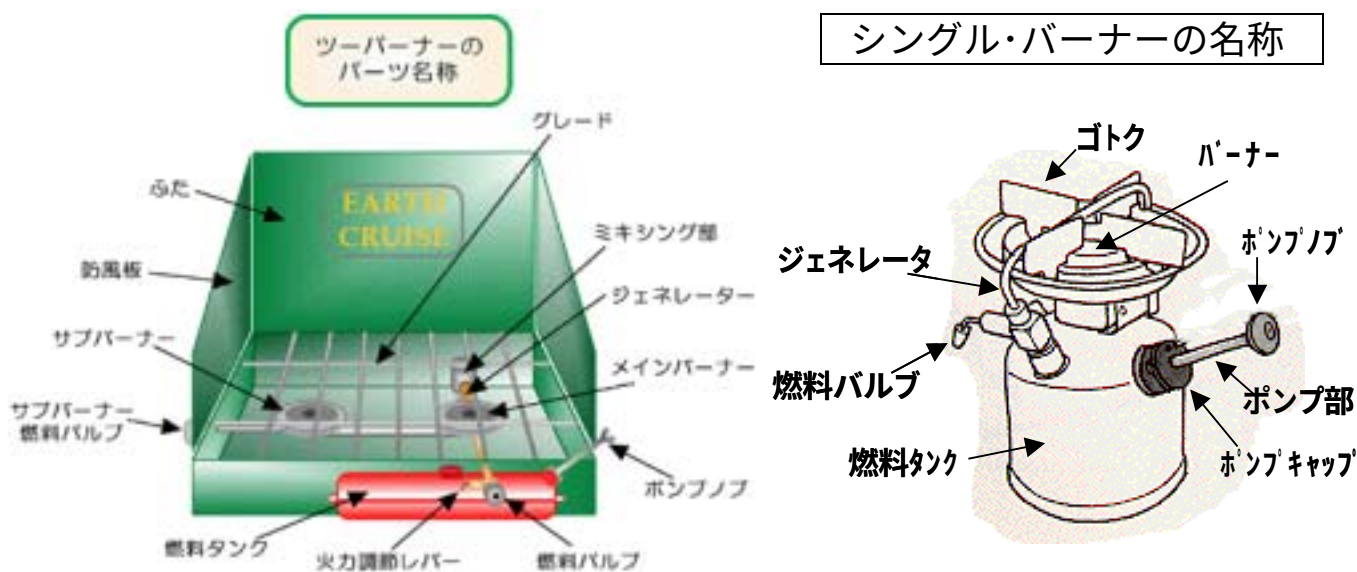
燃料を揃えた方が合理的という意味で、ホワイトガソリン・タイプのツバーナーを使用するキャンパーにおすすめします。低温下でも火力が安定している点、ポンピングという作業が必要な点はツバーナーと変わりありません。山岳での使用を考慮したモデルが多いため、キャンプではオーバースペックかもしれませんが、道具としての存在感があり、所有欲をくすぐられるモデルもあります。



LP ガス・バーナ

一般的な使用スタイルを考えると、ホワイトガソリン・タイプより、この LP ガス・タイプがおすすめです。補助的役割である以上、操作は簡単な方がいいからです。さらにこのタイプはコンパクトに収納できるため、登山やツーリングなど、オートキャンプ以外にも活用できます。ホワイトガソリン・タイプのツバーナーを使用するキャンパーにとっては、燃料の種類が増えることにはなりますが、クルマでの運搬ならばそれほど問題にはならないでしょう。

2. バーナー・コンロの各部名称



3. ツーパーナーの点火方法

① 燃料は、8 分目まで入れる



まず燃料バルブを締め、ポンプノブも止まるまで右に回しておきます。燃料は、ポンピングで圧力かける空気をタンク内に残すため、満タンにせず 8 分目まで入れるのがポイントです。給油する時は付近に火気の無い状態で、タンクを水平にして行なってください。

最初はこぼさないように慎重に。

1. リュブリカント（ポンプカップ用オイル）を、ポンプノブ脇の穴から **2～3 滴** 注入する。ポンプカップとシリンダーの間には、オイルが常にある事でシールが保たれていますので、**定期的(1 日 1 回)**な注油が必要です。ポンプカップのゴムを保護するために必ず**専用のオイル**を使用してください。（コールマン リュブリカント）



② ポンピングは、硬くなるまで



燃料バルブが OFF なのを確認したら、ポンプノブを左に 2 回転させ、親指でノブの穴を押さえながらポンピングを開始します。手前に引いて奥まで押し込む正確なストロークを繰り返す、固くなってノブが入らなくなるまで続けます。目安は 100～150 回です。固くなったら親指を外し、ノブを押し込んで止まるまで右に回します。

しっかり持って正確なストロークを。

③ 燃料タンクをセットします



ジェネレーターの先端を本体の穴に通し、ミキシング部の穴に差し込みます。タンクのクリップを本体前部の穴に合わせて差し込み、しっかりと取り付けます。次にサブバーナーの燃料バルブが開いていないか確認し、開いていたら閉じてください。これで点火準備は完了です。

それぞれの穴にしっかりセットする。

④ 点火直後に、再度ポンピング



点火レバーを上にし、柄の長いライターなどの火をメインバーナーに近付け、燃料バルブを左に 1～2 回転させて点火します。点火直後、さらにポンピングします。目安は 10～30 回です。この時燃料タンクがずれないようにしっかり押さえてください

最初に出る大きめの炎には注意しましょう。



⑤ 青い炎が安定のシグナルです



点火直後は赤い炎が出ることがありますが、ジェネレーターを通る燃料が気化されると青い色に変化し炎が安定します。安定しない場合は燃料バルブを素早く 2～3 回ひねってみてください。燃料の通りが良くなり安定します。安定したら点火レバーを下向きにし、燃料バルブで火力調整します。

炎が青色に変化したら正しく点火できた証拠です。

⑥ サブ・バーナーは、メインと併せて使用します



サブバーナーは単独では使用できません。メインバーナーを使用していることが前提で、点火はメインバーナーの炎が安定してから行なってください。ジェネレーターが十分加熱されないと、気化した燃料が届かないため炎は途切れますが、熱を帯びるとやがて安定します。

サブバーナーだけの使用はできません。

4. コンロ取り扱いの注意事項

- (ア) ガソリン・LPガスに関係無く、複数のコンロを並べて使用してはならない。
燃焼時に発生した熱が対流し、コンロの燃料タンクが加熱されて『爆発』する。



- (イ) コンロ本体を焚き火等の近くで使用してはならない。
焚き火等の放射熱でコンロが加熱されて『爆発』する危険性がある。
- (ウ) LPガス等の空になったボンベを、焚き火やコンロの近くに置いてはならない。
空になったボンベには少量の燃料が残っており、焚き火等の放射熱でコンロが加熱されて『爆発』する危険性がある。
★ 空のボンベは、必ず穴を開けて残りの燃料をすべて出してしまう事。
- (エ) ガソリン等の燃料缶は、火の近くや日なたに置いてはならない。
炎や太陽の熱で、燃料缶が『爆発』する。
- (オ) 点火する時に、バーナーの上に顔を出してはならない。
点火時の炎で、顔をヤケドしてしまう。
- (カ) ガソリンは、専用の金属容器で保管すること。
一時的だからと、ポリタンクなどを流用すると爆発や火災の原因となる。

9. キャンプサイトのレイアウト

レイアウトは風と日光を計算しよう

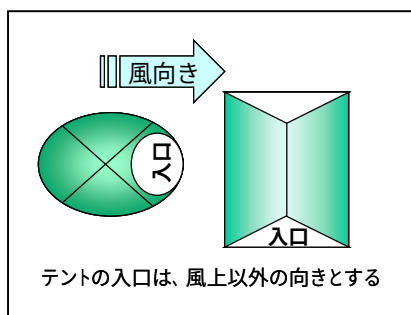


キャンプサイトの第一条件は、安全であることだ。谷間は突風が吹きやすく、地形によっては少量の雨で川が増水する。河川敷も要注意。崖は上も下も安全とはいえない。できるだけ平坦で、ある程度の広さがある場所を選ぶこと。

近くに水場があることは当然だが増水した時のことを考えて、十分な距離を取ってテントを設営する。

焚火を使う場合は風向きを、テントの位置は日当たりを計算することが必要だ。カマドを台所、テーブルを居間、テント

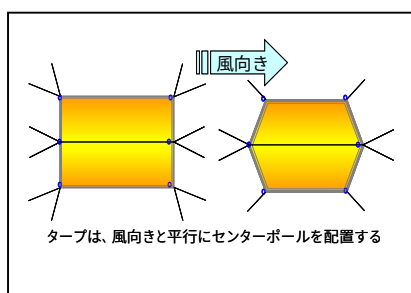
を寝室に見立て、家の設計図を考えながら配置するといい。居間は明るく、寝室は静かに、カマドは寝室から離れたところにレイアウトするのがセオリーだ。道具をただ漠然と並べただけでは、快適なキャンプサイトとはいえない。基本的なレイアウトを踏まえ、季節や地形に応じたフレキシブルな配置を工夫したい。



◆テント

テントの入口は直接風が吹き込まないように、風向きに対して直角の方向か、風下に配置します。入口を風上にすると、突風などでテントが風をはらみ、飛ばされてしまう危険があります。

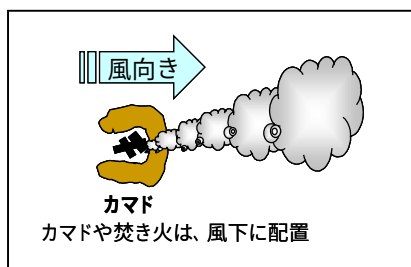
どうしても入口が風上になる場合は、木立等で直接風が吹き込まないように工夫しましょう。



◆タープ

タープは、風が抜け易いように、風向きと平行に配置します。どうしても平行に張ることが出来ない場合は、全体を低くするか、風上側の端を直接地面に固定してしまう方法があります。

(あまり強い風の場合は、一時的にセンターポール間で束ねて風が収まるのを待ちましょう)



◆カマド・焚き火

カマドや焚き火は、風下に配置します。風上に配置すると、煙や灰が飛んでくるだけでなく、火の粉がテントやタープに飛び、火災の原因となります。

◆ トイレ

トイレは、風下の木陰など、あまり人が通らない場所に配置しましょう。

◆ マキ割り場

マキ割り場もトイレ同様、人が通らない場所に配置します。 また、安全のために周囲に、張り綱をして無闇に人が近づかない様に工夫しておくといいでしょう。

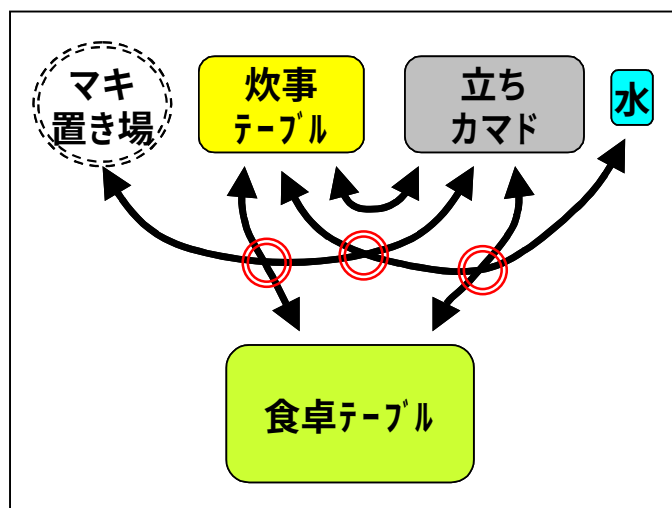
◆ 食卓テーブル

食卓テーブルは、なるべく明るい場所に配置します。

動線（人の動き）が交差しない配置がポイント

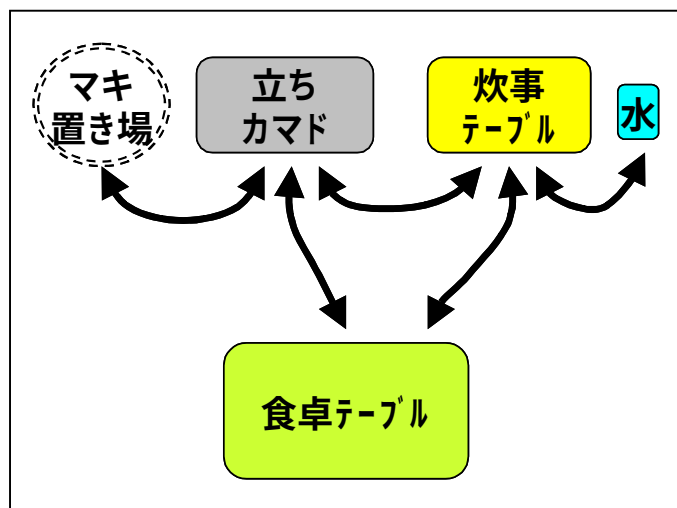
それぞれの配置ポイントが理解できたら全体の配置を考えよう。 この時、重要なことは、サイト内での人の動きが交差しない様にそれぞれの配置を行うことです。

『動線』が交差している配置（悪い例）



「立ちカマド／マキ置き場」の動きと、「炊事テーブル／水」の動きが、他の動きと交差しており、食事準備の忙しいときにはスカウトがぶつかり合ったりして、とても危険な感じです。

『動線』が交差しない配置（良い例）



「立ちカマド」と「炊事テーブル」の配置を入れ替えることにより、それぞれの人の動き（動線）が交差しなくなりました。

この配置であれば、食事準備の忙しい時でも、炊事当番のスカウトがお互いにぶつかり合うこともなく、スムーズな作業が期待できます。

練習問題

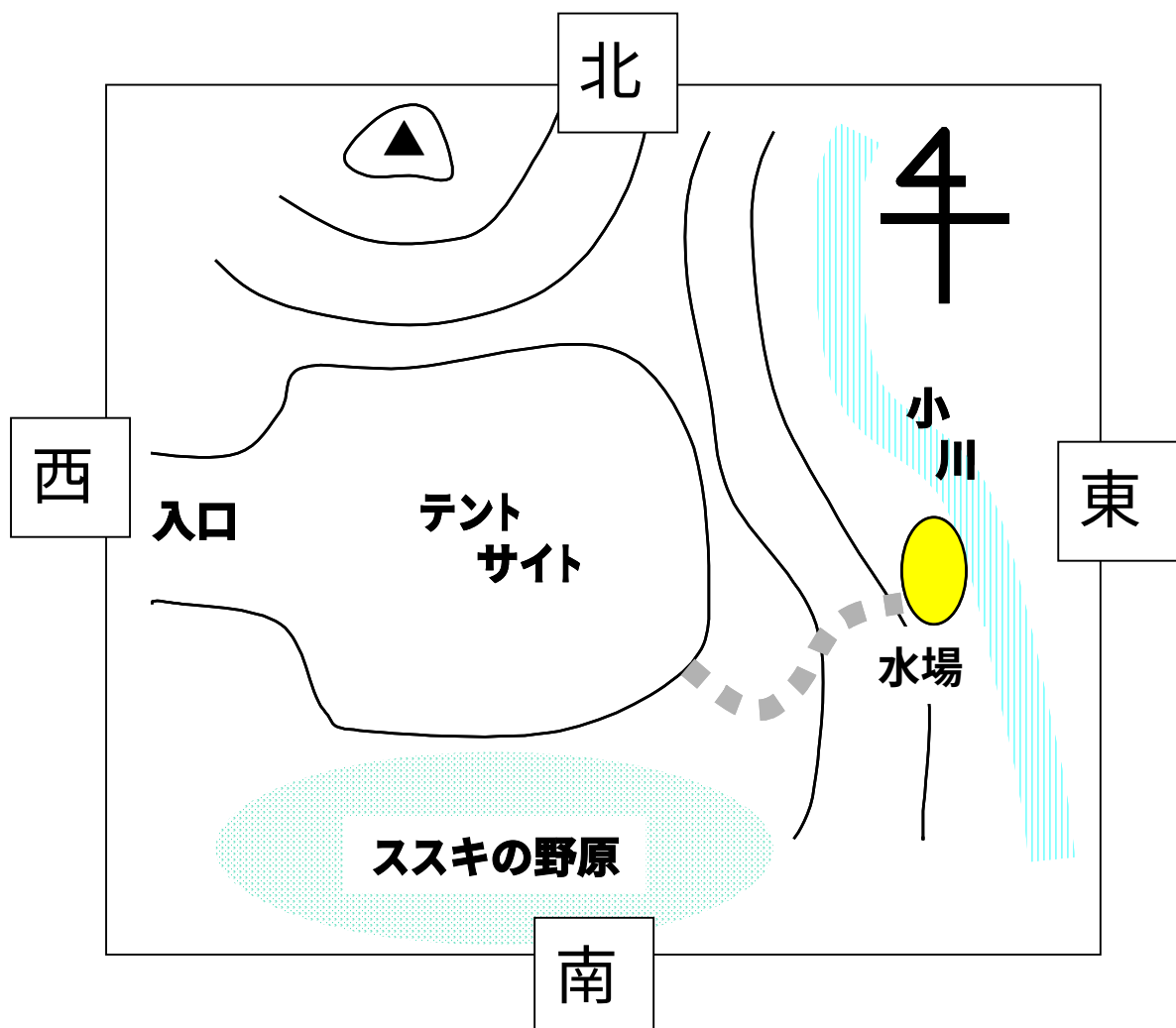
2003年 秋。 ××団ボーイ隊・凸凹班が、無謀にも初級スカウトだけで、秋の班キャンプに出かけてしまいました。 これを知った班長の君は、直ちに後を追いかけてキャンプサイトに来て見ました。

なんとか初級スカウトだけで設営が出来たようです。

でもちょっと待って、配置がなんだか変ですよ。

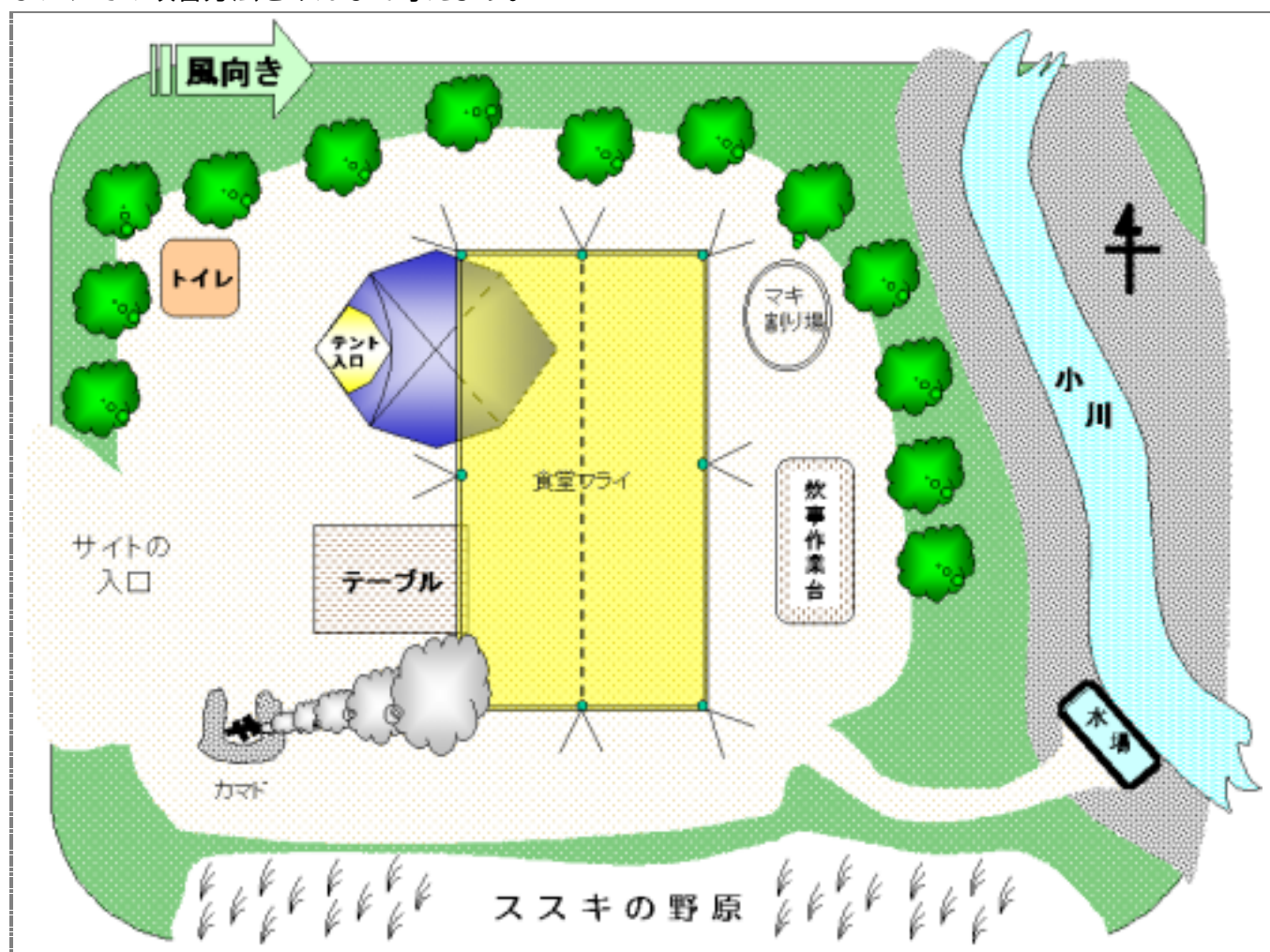
班長として君は、どんな指示ができるかな？

- ① サイトの北側には、小さな山があります。
- ② 東側には、一段下がったところに水場をかねた小川が、北から南へ流れています。
- ③ 南側は、ススキの野原がひらけていて、日中は、秋の陽射しがサイトに届きます。
- ④ 西側は、サイトの入口です。
- ⑤ 日中は、西側から心地よい風が吹き込んできます。
- ⑥ 天候は、夕方から明日の朝にかけて小雨が予想されます。



レイアウト K Y T シート その1

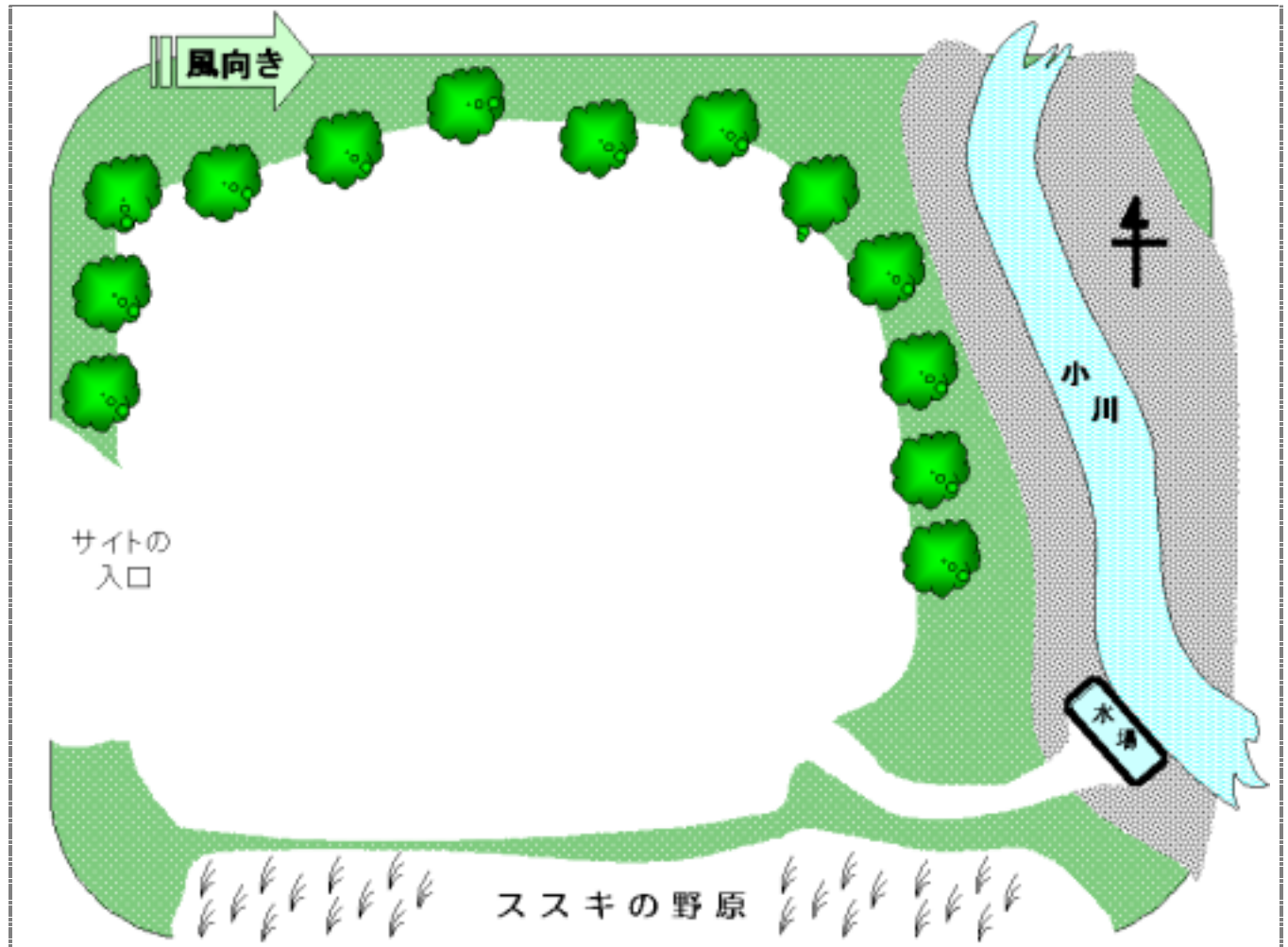
下図の班キャンプ・サイトの配置を見て、予想される危険や改善個所を探してみよう。
また、その改善方法をみんなで考えよう。



	改善が必要なところと、改善方法を書き出す
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	

レイアウト K Y T シート その2

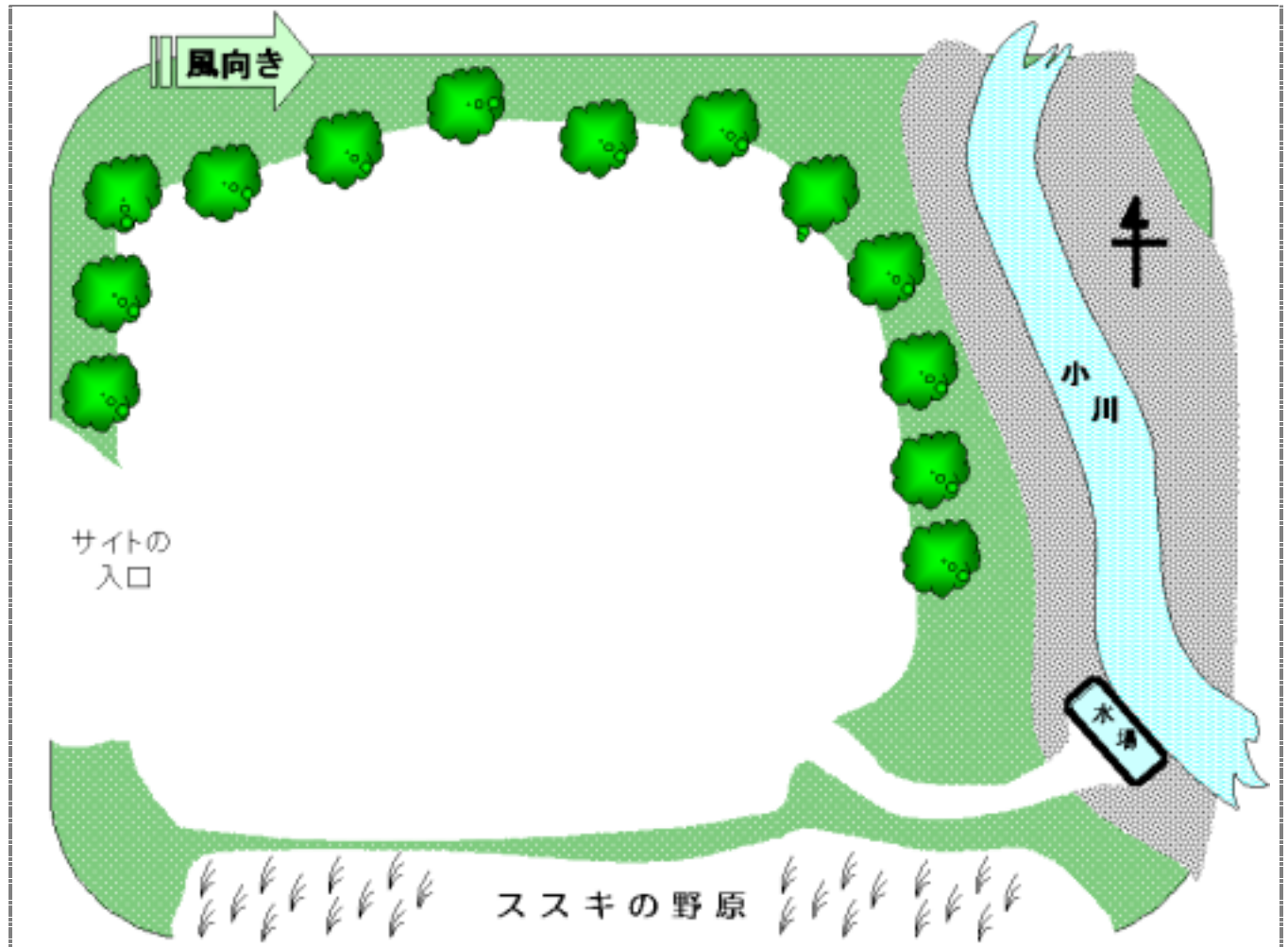
安全な野営地が決まった。 さあ、君達の『理想のテントサイト』を設計してみよう。
絵の中に『テント』『テーブル』『食堂フライ』『かまど』『トイレ』等を書き込んでください。
また、そこに決めた理由を書いてください。



	配置を決めた理由
1. テント	
2. テーブル	
3. 食堂フライ	
4. 炊事作業台	
5. マキ割り場	
6. かまど	
7. トイレ	

レイアウト K Y T シート その2

安全な野営地が決まった。 さあ、君達の『理想のテントサイト』を設計してみよう。
絵の中に『テント』『テーブル』『食堂フライ』『かまど』等を書き込んでください。
また、そこに決めた理由を書いてください。

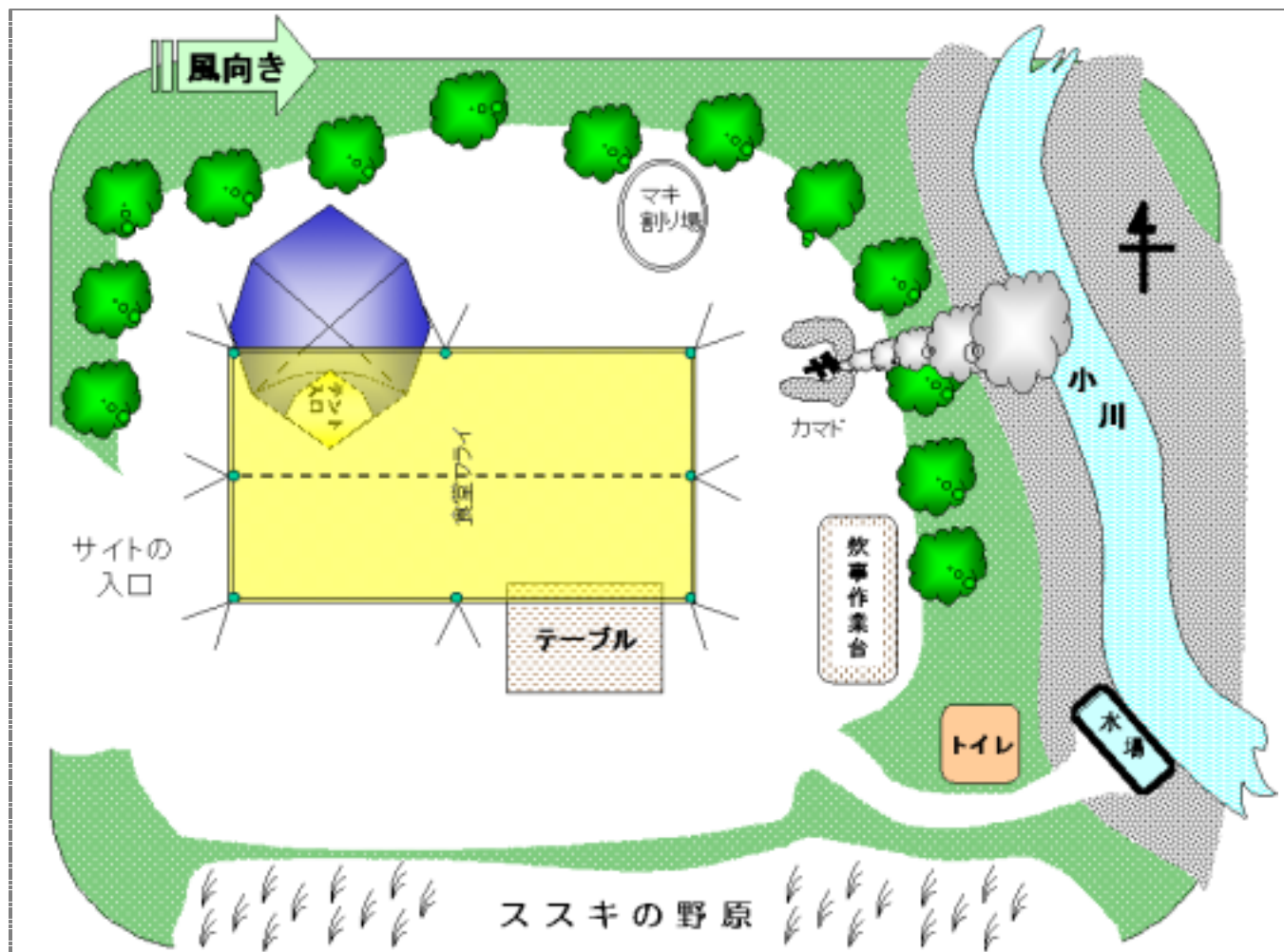


	配置を決めた理由
1. テント	
2. テーブル	
3. 食堂フライ	
4. 炊事作業台	
5. マキ割り場	
6. かまど	
7. トイレ	

レイアウト例.1

◆例題のサイト環境で考えられる一般的なレイアウトです。

このレイアウトでは、ドームテントの入口が食堂フライの下に入っており、予期せぬ雨天の場合でもテントと一体の広いスペースが確保できます。 また南側が開いているので雨の心配がなければ食堂テーブルを食堂フライの外へ出して、秋の陽射しとススキの野原を存分に鑑賞することができます。

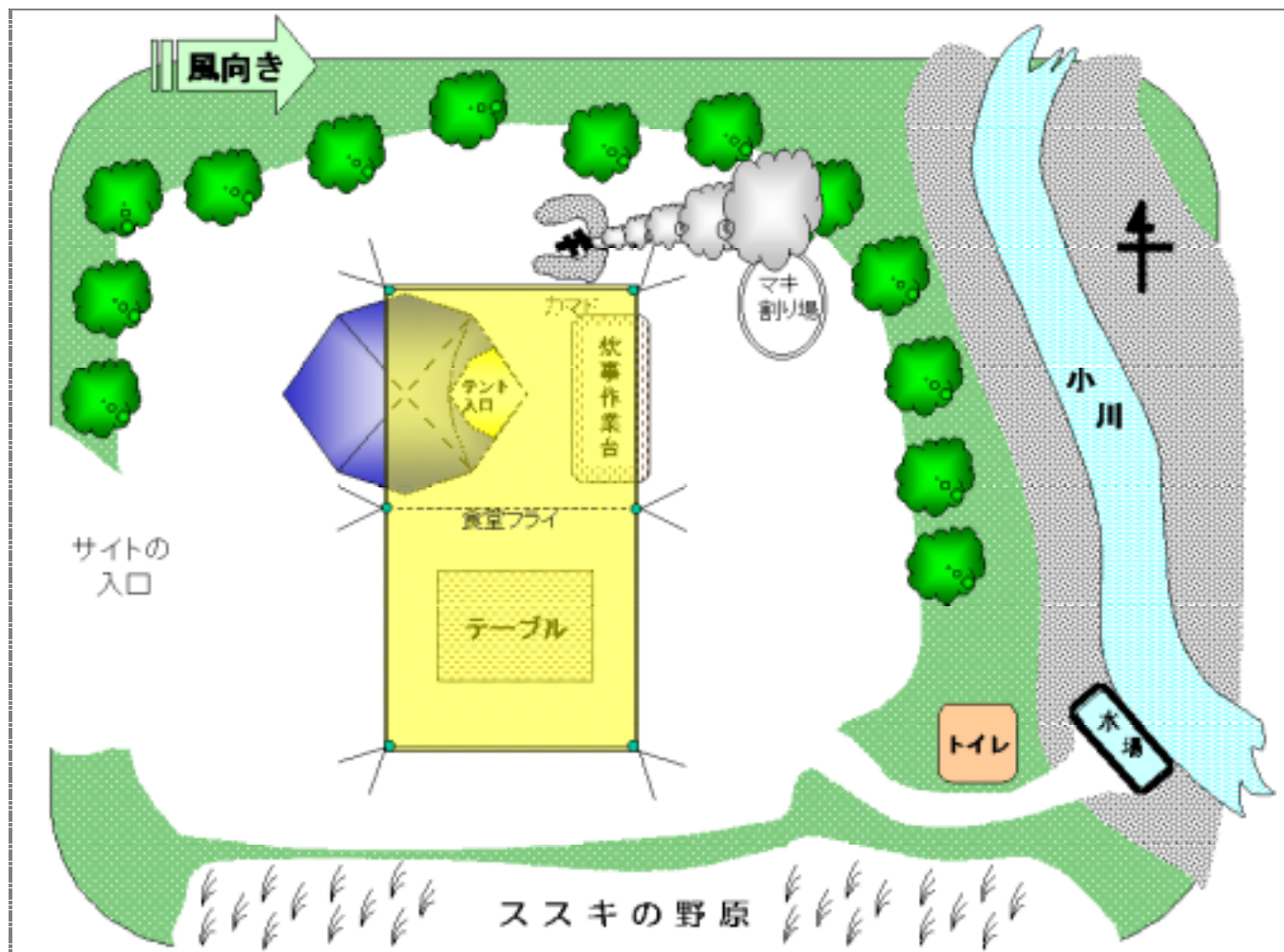


	配置を決めた理由
1. テント	東風を避けるため、木立の近くに配置すると共に、秋の雨を考慮して、ドームテントの入口を食堂フライの下に入れた。
2. テーブル	南の開けた場所に配置。 また雨天時は、直ちに食堂フライの下に移動出来ることも考慮した。
3. 食堂フライ	風向きに対してセンターポールが平行となるように配置。
4. 炊事作業台	水場に近く、明るい場所で、日中の活動の邪魔にならない場所に配置。
5. かまど	風下で、炊事作業台に近い位置に配置。
6. マキ割り場	かまどに近く、もっとも人の近寄る可能性が少ない場所を選択。
7. トイレ	風下で、サイトから多少離れた位置で、下草などで人目に着きにくい場所。 バクテリアが豊富な土壌であること等を考慮した。

レイアウト例.2

◆雨天時のレイアウト例です。

このレイアウトでは、食堂フライのセンターポール位置を短辺がわにする事で、食堂フライに溜まった雨水が直接ドームテントに落ちない様、工夫した事と、ドームテントを大きく食堂フライの下に入れることで、雨天の場合でもテントと作業場の一体スペースを確保しています。全体に狭くなった事は仕方ありませんが、その分、人の動線を考慮してカマドやマキ割り場の位置を決めています。



	配置を決めた理由
1. テント	雨を考慮して、ドームテントの半分以上を食堂フライの下に入れた。これにより、フライからの雨だれがテント入口側に垂れてこない。
2. テーブル	雨を避けて、食堂フライの下に配置。
3. 食堂フライ	センターポールの配置を長辺ではなく、短辺側とすることで、テントとテーブルの配置に適応した。
4. 炊事作業台	雨を避けるために、食堂フライの下に配置。
5. かまど	炊事作業台に近い位置に配置。
6. マキ割り場	かまどに近く、もっとも人の近寄る可能性が少ない場所を選択。
7. トイレ	風下で、サイトから多少離れた位置で、下草などで人目に着きにくい場所。バクテリアが豊富な土壌であること等を考慮した。